

埼玉の夜明け

第48巻
第3号
通算150号

日本キリスト教団
関東地区委員
会
社

第48回信教の自由と平和を求める二・一一集会

『戦時下の宗教弾圧と私たち』

〜第二次大戦下における事例に学ぶ〜

岩槻教会牧師 小林 眞



一九四一年六月、日本の中でそれぞれの教会的・教派的伝統をもって歩んでいた三〇余派の教会合同をもって日本基督教団が創立された。

ただ、合同の要因は、開教以来の「公会主義の願いを継承する自発的合意」に由来する。日宣教師のほとんどは、無教派的合同教会を指向してないことを受けて、教会でなく公会を開いた。この流れという理解と、「国家の強制による合同」と理解する立場があるが、明確

に「どちらかの一方だけでの合同」ではないと思われる。

後者の方には、教会が国家に屈したことを悔い改めなければ、再び過ちを繰り返しかねないという。私はその思いをある程度認めるが、全ての教会・教職・信徒が国家に屈したとは思わない。

実際に弾圧に抵抗した教会もあるし、殉教の死を遂げた牧師も少なくない。

そこで、あの状況の中で、国家に精いっぱい抵抗した教会の例として、三年前まで仕えていた遠州教会（東海教区・浜松市）の歩んだ道を紹介させて頂く。

なお、以下の道を歩んだ時に、遠州教会の伝道・教会をされていたのは、松本美実牧師（一九二九年〜一九七五年）で、二五歳で赴任し、七〇歳で隠退されるまでの

四六年間、遠州教会一筋であり、同教会の成長も、本日の中心の抵抗も、松本牧師の指導によるところが大きいと思われる。

参考までに、松本牧師著「私の見てきた遠州教会の歩み（一九七六年出版）」の前置きで、「福音に立ちつつ、ささやかながら『教会と社会』との問題に真剣にとっくんできた（ママ）教会だと私は思っている」と書いておられる。以下、遠州教会、その会員が実際に「行ったことを紹介したい」。

一、「戦争反対声明」の送付

一九三一（昭六）年に、満州事変が始まるや、教派（合同前）を超え、全国の教会に「戦争反対声明」を送付したのである。

尚、この声明を送付した理由については、①この戦争は負ける。②戦争は殺人だから 同書に記されている。

同書に「我々のやったことは、そうたいしたことではなかった。どれだけ世論に訴え得たか、またあのそうそうたる戦争への大きな国家的な激流を少しでも方向修正をさせ得たか、となるとなおさら取るに足らないことだった。しかし、それでも用心と勇気のいることだった」と記されている。

二、会員の建白書（一九三六年）

皆さんもご存知の方も多しと思われるが、長谷川保氏も、同教会

の会員であり、当時の状況の中で天皇批判と軍人批判をし、浜松憲兵隊長に提出しています。

：略：天皇及び皇室を、我が日本国の統法者として尊敬するものであります。しかし彼はあくまでも人間であつて礼拝の対象であるべき神ではありません。：略。

（実際は、四千六百字の長文）この結果、当然、逮捕されたが、どのくらい留置場に居たかの記録はないので不明である。

三、再度「戦争反対声明」送付

一九四一（昭二六）年十二月に太平洋戦争が始まると、前述と同じく、再度、全国の教会（日本基督教団）に送付。

二度に互つて送付された「戦争反対声明」であるが、同書には、「反響は少しはあった。わざわざ訪ねてくれた牧師もいた。敗戦後、時にこれが話題になることもあった。だが、敗戦の惨めさの中からかえりみると、本当に、取るに足らない小さいことであつたと思う」と記されているが、「取るに足らない小さいこと」であるうか。

確かに戦争の被害等から考えると、くらべものにならないかも知れないが、主イエスが語られたように「平和を実現する人には、幸いである（マタイ五・九）」をその通り歩んだことではないだろうか。

四、飛行機献納運動への反対

一九四三（昭一八）年に、日本の兵器が枯渇している証拠と思われるが、飛行機献納運動が起こり、各界に広がり、日本基督教団でも総会において賛成としての決議をなして全教会に呼びかけられた。

しかし遠州教会は、この運動には反対し、献金を集めたものの、それらを中国・済南（チーナン）で伝道しておられた佐治牧師、漢口（ハンコウ）の黒田牧師に複数回送付し、戦争被害者の救援金として用いて頂いた。

特に、二で「建白書」を書いた長谷川保氏は「教会が国家や戦争に協力するとしても、それには教会らしい方法があるはずだ」と強硬に主張した（同書）。

ただ、近隣のA牧師は「松本牧師は、教団の意向に反している」と富田統理に訴えられ、教団事務局に召喚されるが、統理も同じ日本基督教団に属する知己の故に、「今の時代、それでは困るではないか」だけで済んだとのこと。

五、防空壕作製に、会堂を提供

一九四四（昭一九）年十二月より、浜松市に空襲が始まり、被害が出始めたため、町内会の者が集まり、浜松城近くの裏山に防空壕を掘り始める。しかし、壕の内部補強の柱などの材料が足りない。その時、松本牧師は人命を第一と考え、臨時長老会を開き「会堂を

『右翼と左翼』をカメラで追ったあるドキュメンタリー番組のなかで観た。右翼団体の『塾長』という青年がしみじみと述懐するのだ。幼い頃に祖母と行った皇居の一般参賀で、忘れられない光景に出会ったという。

「おばあさんが泣くわけですよ。天皇陛下がおでましになると。不思議だったけど、おばあさんが美しく見えたね」。

この青年は、成長し右翼青年となつてゆく。

わたしにも思い当たることがある。一九六八年は明治百年であった。このとき、わたしは中学生。「明治百年」記念テレビ映画『明治天皇』は一九六六年から六七年に放映された。明治天皇御製歌『よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ』を主題歌とする番組だ。なぜかこの御製歌を聴くとよく意味も知らないのに落涙してしまうのだった。

母は、天皇が好きだったと思う。昭和天皇を愚直に信じていた。敗戦を決断するときの御前会議で裕仁は「自分はいかになろうとも万人の生命を助けたい」と、また「身はいかになるともいくさどどめけり、ただたふれゆく民をおもひて」と詠んだという「親の心情」の持ち主だと。さらには、GHQマッカーサー元師との会見時においては、「私の一身はどうなるかと構わない」と述べたとい

う物語を信じ切っていた。

私の従姉妹の父親は日本基督教会の牧師小川武満だ。父の妹星子の元夫にあたる。キリスト者遺族の会、平和遺族会代表として久しくヤスクニ闘争に関わった。伯父は軍団少年として育ち、満州医科大学予科時代には、皇室中心の愛国的倫理運動希望社運動に加わったという。謀略・満州事変に夢破れ、キリスト教を求道し、受洗する。

私の父は小川の満大の後輩だ。父もおそらく同様の精神遍歴をしたのであろう。受洗している。しかし、天皇への心情はどうであったのか。この問題で語り合う機会にはついに巡り会えなかつたのは残念だ。

皇居前で泣く祖母を観て、不思議だが美しいと思つた青年の心情は、私のファミリーヒストリーにも刻まれている。明治天皇御製歌を聴いて涙してしまふ自分、違和感を感じつつも、宮城遙拝をしたカルト時代の自分は、まぎれもない圧倒的多数の日本人と同様に天皇制支配の原理のなかで人格形成をしてきたのだ。

この支配原理のど真ん中には、実は確たる思想は存在しない。中心にあるものは心情原理だ。心情がしっかりと絡め取られている。この心情原理を超える思想・信仰を自らのうちに自覚的に打ち立てること、これこそは、キリスト者各

自の課題ではないだろうか。心情の原理を超える意志としての原理だ。神が賜いし、第一誠「あなたがたは、わたしの他、なにもものをも神としてはならない。」という公理に意志的に従う思想・信仰が必要なのだ。

最後に、天皇裕仁は、実際はどういう人物であったのかをみる。歴史を正確に知らねばならない。以下に、明らかに自己の保身を目的としたといわれる『天皇メッセージ』を紹介する。これは一九四七年九月、米国による沖縄の軍事占領に関して、宮内庁御用掛の寺崎英成を通じてシーボルト連合国最高司令官政治顧問に伝えられた天皇の見解をまとめたメモだ。内容は概ね以下の通り。

(1) 米国による琉球諸島の軍事占領の継続を望む。

(2) 上記(1)の占領は、日本の主権を残したままで長期租借によるべき。

(3) 上記(1)の手続は、米国と日本の二国間条約によるべき。裕仁は保身のために、沖縄を米国に渡すことを提案していたのだった。

狭山事件の再審を求める 市民集会参加報告

和戸教会 後藤龍男

二〇一七年一〇月三十一日(火)
一二・三〇から東京日比谷の屋外

音楽堂で市民集会が開かれました。五四年も無実を叫びつづける石川一雄さんの冤罪・狭山事件の再審を求める集会ですが、この日は一九七四年一〇月三十一日に東京高裁での寺尾判決から四三年となる日でもあります。

今回も多方面からの参加者で会場は埋め尽くされ、この間の参加者達の狭山事件への取り組みの姿勢はいささかも衰えることなく再審無罪を勝ち取るまで闘うことの確認をする集会でもありました。

石川一雄さんは今七八歳です。この日御連れ合いの早智子さんと共に演台に立ち再審無罪を勝ち取るまで頑張るとの思いをアピールしました。会場には狭山事件に取り組むいろいろな市民団体が毎回参加していますが、宗教者もキリスト教、仏教、諸宗教の仲間たちが集まりました。

「キリスト者前段集会」ではNCC、部キ連、カトリック、聖公会、他教派、日本基督教団の各教会、同宗連等の参加者達からの連帯のメッセージがあり、関東教区からは東野尚志教区総会議長が今後も関東教区は真摯に狭山事件に取り組んでいくとの力強いメッセージがありました。

関東教区の各地区の教会からも参加者がありました。埼玉地区からも牧師・信徒の皆さんが参加しました。

石川さんが明らかに無罪である

ことの証拠が検察庁から少しずつ開示されつつありますが、その一つに有罪の決め手とされたものに「万年筆」があります。

昨年八月に狭山弁護団が提出した下山鑑定は、当時の科学警察研究所がおこなったインクの鑑定結果にもとづいて、発見万年筆が被害者のものでないことを科学的に明らかにしました。殺害後被害者の万年筆を持って帰ったという石川さんの自白が虚偽であり、有罪判決は根底から崩れたことを示しています。そもそも、万年筆が発見された場所は勝手入口の高さがわずか一七六センチ、奥行き八・五センチの鴨居の上でした。警察は一〇数人の刑事による2時間以上かけた自宅捜査を二回も行っていましたが、その時は発見されず、事件から二か月近く経てこの鴨居から発見されたのです。万年筆の発見経過はあまりにも不自然です。捜査の不正、証拠のねつ造の疑いさえあります。検察庁にはまだまだ隠し持っている証拠書類があります。

わたしたちキリスト者としても部落差別により尊い人権がふみにじられ冤罪で苦しんでいる人がいることに関心を持って下さい。そして石川さんが「見えない手錠」から解き放されるために再審が開始されることを祈っていたのだと思います。

一〇・三二市民集会

沖縄・高江から 見えてくること(その2)

埼玉大通り教会 沼田 祐子

日本で唯一の地上戦となった沖縄の事は学校でも学び、映像で観たり、歴史として知っているつもりでしたが、高江のヘリパッド建設反対に関わり、高江や沖縄の方々と直接知り合ったことで、沖縄が今も苦しみながら平和を作り出そうとしていること等、離れていても情報と痛みが伝わってきた、居てもたつてもいられなくなります。

昨年一二月に宜野湾市の緑ヶ丘保育園の屋根に、保育中、米軍ヘリの部品が落下したことは記憶に新しい事です。ここが普天間パプテスト教会付属の保育園だと聞くと、教会につながる私たちは沖縄の基地問題が身近に感じたのではないのでしょうか。

そのたつた六日後に普天間第二小学校の授業中の校庭に大型輸送ヘリの窓枠が落下。そして一月になると六日に伊計島に輸送ヘリが不時着、八日読谷村廃棄物処分場に攻撃ヘリが不時着、二三日渡名喜村で攻撃ヘリ不時着……いずれも米軍普天間基地所属のものでした。

「それで何人死んだんだ？」と国会でヤジをとばし辞任した副大臣もいましたが、空き地にヘリが不時着して何大騒ぎしているの、小さな部品が落ちてきたくらい

で、自作自演なんじゃない、と中傷する声にも沖縄の人々は苦しめられています。

緑ヶ丘保育園の園長先生(牧師先生)や先生方、保護者の方がどんな思いで誹謗中傷する言葉を聞き、今もヘリが飛び回る下で子どもたちの安全を守りながら保育しているのかと思うと、胸がつぶれそうになります。

昨年、国連で一二か国・地域の賛成多数により核兵器禁止条約が採択され、そこに到るまでの地道な功績により、ICAN核兵器廃絶国際キャンペーンがノーベル平和賞を受賞しました。

ICANの主要メンバーには日本人もおり、多くの日本の団体が連なっていますが、日本では小さくしか報道されませんでした。日本政府が「北朝鮮の核・ミサイル開発の脅威が迫る現状では、アメリカの核抑止力に頼らざるをえない」と、核兵器禁止条約にも反対の姿勢を貫いているからでしょうか。

ノーベル平和賞の授賞式ではICANと共に活動してきた広島市の被爆者サロー節子さんが演説し、核兵器をめぐり緊張が高まる中でも核廃絶を目指すべきだと力強く訴えました。

「くすぶる瓦礫の中に捕えられながら、押し続け、光に向かって動き続けました。そして生き残りました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。この会場のすべての

皆さんと、これを聞いている世界中のすべての皆さんに対して、広島の廃墟の中で私が聞いた言葉をくり返したいと思います。「諦めるな。押し続けろ。光が見えるだろう?そこに向かって這って行け。」採択された核兵器禁止条約が発効されるまでにはまだ険しい道のりが待っていますが、共に押し続けたいと思います。

二月の名護市長選挙では辺野古基地建設反対の現職稲嶺市長が破れ、暗澹たる思いに駆られました。沖縄は江戸時代の薩摩侵攻から、明治政府の琉球処分、第二次世界大戦での地上戦、アメリカ統治、望んでいた日本復帰は米軍基地が押し付けられたまままで今に至ります。でも諦めず路上に座り込み、平和への礎になろうと行動し意思表示を続けています。

各教会の社会活動

□上尾合同教会

●映画上映会「ひまわりく沖縄は忘れない、あの日の空を」に一二名参加 ●「沖縄県民の民意尊重と基地の押し付け撤回」の署名五二筆 ●山谷まりあ食堂への献品(衣類等)届ける ●「子供の貧困と支援」講師・湯浅誠氏(上尾市プラザ)に三名参加

□岩槻教会

●地区八・一五集會に六名参加 ●来年度から「平和集會」を持ちたい ●個人的に色々な社会問題の集

會に参加している。

□大宮教会

●熊本・大分地震救援募金 ●川越キングスガーデン「主の園」ティサービス(手造りお菓子とお茶)、ワークキャンプ(草取り、洗濯物たたみ、雑巾作り) ●平和を語る會・テーマ「語り継ぐ戦争」参加者七七名 ●古切手の収集 ●災害対策・家庭用チラシ配布と災害用備蓄品購入(予算五万円)

□加須教会

●募金活動 ●個人的に子どもの貧困や原発問題の集會に参加している。

□川口教会

●熊本地震へ募金活動 ●敗戦記念日を覚えて「沖縄基地問題」について研修会一二名 ●教区社会問題協議会「群馬における朝鮮人・韓国人強制連行・労働の歴史と現在のヘイトスピーチ」に二名参加 ●地区環境問題講演会や八・一五集會への参加

□埼玉大通り教会

●社会問題茶話会「いのちの森・高江」を鑑賞して意見交換 ●平和聖日(八月第一週)礼拝後、月例の祈祷会の祈りの課題を「平和」とし、祈祷会の後、有志で戦責告白を朗読

□和戸教会

●8月「平和を求め祈る會の学習會」牧師が発題・沖縄が置かれている基地の実情を学び話し合い ●狭山事件再審請求等の署名 ●壮年会メンバー八人が毎月の例會で社

会問題について話し合う。(憲法問題、子どもの貧困、……等)

社会委員会報告

◎第五回社会委員会

日時：一月二一日(日)

午後三時～五時

場所：川口教会 出席者六名 協議

●報告事項(新年合同礼拝、地区委員会、部落差別・人権問題)

●第四回委員会議事録承認の件 ●二・一一集會の準備(担当者決め)等

●「埼玉の夜明け」原稿について

●新年度の準備について ●第四八回「信教の自由と平和を求め二・一一集會」

日時：二月一日(日)二時半～場所：大宮教会

講演：「戦時下の宗教弾圧と私たち」(第二次大戦下における事例に学ぶ)

講師：小林眞牧師(岩槻教会) 出席者一一八名

編集後記

戦争の出来るよう、安倍政権、自民党が目指す憲法改訂問題はいよいよ本格化してきた。そんな中に大宮教会で開かれた二・一一集會には一一八名の参加があった。集會では憲法が戦前の憲法のよいうな方向に行こうとしている情勢にキリスト者としてどうしていいたら良いか共に考えた。(浅子)